

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
C-141	14-317	慶應義塾大学
題名(原題/訳) Effects of baseline problematic alcohol and drug use on internet-based cognitive behavioral therapy outcomes for depression, panic disorder and social anxiety disorder. 鬱病、パニック障害と社会不安疾患のためのインターネットをベースとした認知行動療法の結果に対するベースラインにあるアルコールと薬物の問題使用の影響		
執筆者 Gajecski M, Berman AH, Sinadinovic K, Andersson C, Ljótsson B, Hedman E, Rück C, Lindefors N.		
掲載誌 PLoS One. 2014 Aug 14;9(8):e104615. doi: 10.1371/journal.pone.0104615. eCollection 2014.		
キーワード	PMID	
うつ病、薬物使用、インターネット、認知行動療法	25122509	
要旨 目的: 患者の問題の薬物使用の有病率と影響が、鬱病、パニック障害と社会不安疾患のためのインターネットをベースとする認知行動療法 (ICBT) の結果に関して調査された。 方法: ベースラインおよび治療の結果において、1601 例の ICBT 患者は、アルコールと薬物使用 (AUDIT/DUDIT)、抑うつ症状 (MADRS-S)、パニック障害症状 (PDSS-SR) と社会不安症状 (LSAS-SR) のために自己評価する手段で評価された。 結果: 問題の薬物使用 (AUDIT≥男性 8、≥女性 6; DUDIT≥1) は患者の 32.4%にみられた; 24.1%はアルコールのみ、4.6%は薬物のみ麻痺させて、3.7%は両方の使用であった。危険なアルコール摂取とアルコール依存症の可能性が高いことは、パニック障害の結果に負の影響を及ぼした、そして、危険な薬物使用はより悪い社会不安の結果に関連した。 鬱病の結果は、物質使用に影響を受けなかった。治療にたいするアドヘアランスは、男性と 25-34 歳の間で問題薬物使用に負に影響を受けた;アルコールと薬物の混合性使用は、アドヘアランスに対して女性と 35-64 歳で負の影響を及ぼした。 結論: 問題の薬物使用は ICBT 治療を排除しないが、結果(特にパニック障害患者のための問題アルコール摂取と対人不安患者のための危険薬物使用)を悪化させる。 男性で若年患者を問題の薬物使用と女性または混合性物質使用の高齢患者を扱うとき、ICBT の臨床医は特に注意を働かせなければならない。		